

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

カイが貫く！

【作者名】

無明神風流

【あらすじ】

幼女の神様に気に入られたカイは因果逆転の深紅の魔槍　ゲイ・ボ
ルグを手にアカメが斬る！の世界に転生する

カイを待つ未来は希望か？それとも絶望か？

異世界を貫く！

なにもない真っ白な空間に俺　カイは目の前にいる可愛い少女と
相対していた

「って言うかこれはどんな状況なんだよ？」

「はじめまして……って言うのは可笑しいですよ？先ほどぶりです
ね！」

「あゝ確かにさっきぶりだな。で、ここはどこなんだ？」

「ここは私が作り出した異空間です！ちなみに貴方は…」

作り出したって……なんなんだこの少女は？それに何を言いつら
そうにしてるんだ？まさか……

「ここは死後の世界でもあって俺はもう死んでるってわけか？」

「ッ？はい……申し訳ないのですがそつななのです……こちるの不手際
で貴方を殺してしまったのです。私は直接、助けようと思ったのです
が逆に助けられてしまって、貴方は…」

なるほどな …この幼女が俺が助けたあの幼女なんだな

「別に恨んじゃいねーよ。これが俺の運命だった …それがそっちの
不手際だったとしても結果としてそれが運命だったんだからな」

「や、優しすぎるのです …流石は私が入った魂を …それで申
し訳ないのですが貴方には転生して欲しいのです。ただ急なことで
準備できたのはこの世界だけだったのですが …」

転生ね …あの二次創作でよくあるあれだよな？さてさて。俺の転
生先は …

「アカメが斬る？これって …」

「もしかしなくても死亡フラグ満載で下手をしなくても死んじやうあ
の世界です」

「チェン」この世界しか準備できなかったのです「マジかよ …ならい
くつか特典付くのか？」

「それはもちろん付きますよーっという訳でさっそく準備しますので
心を楽にして、特典を想像してください」

あ、声で伝えるんじゃないやなくて想像してきまるのか。それじゃ想像するか…眼を閉じておくかな

俺が想像しているのはあの深紅の槍を手にした青い槍兵。彼が昔から大好きなんだよな

「……………はい、わかりました。眼を開けてください」

俺は眼を開けるといつの間にか右手の中に深紅の槍を持っていた。重さ感じなかったぞ？

「ふう、少し張り切り過ぎちゃいました。手に馴染みますか？」

「ああ、完璧なぐらいにな」

振り回してみただけどかなり軽いな。それに身体によく馴染む

「気に入っていただけたなら私も嬉しいです。その槍はアカメが斬る！の設定に合わせた帝具、因果逆転 ゲイ・ボルグです。奥の手として狙った所を確実に貫く感じですね」

「なるほどな。助かるよ…」

「それと貴方の身体能力なども上げておきましたので…後は頑張ってください…」

「おう…任せと…け…?」

俺の足下がいきなり空いて俺はその穴に落ちていった

自己紹介を貰く！

名前
カイ

年齢
25

容赦

fateのランサーもといクー・フリーリン

趣味

料理

魚釣り

修行

強者との戦い

昼寝

武器

普通の槍

練習などのために使う普通の槍

帝具ばかりに頼ってはいけないと思いちよくちよく使用しているため、チラホラと傷が入っているが大事にメンテナンスをしている

因果逆転 ゲイ・ボルグ

転生する際に幼女の神様から貰ったオリジナル帝具？

禍々しいぐらいに紅い槍

い
どのような状態でも狙ったところに突きを放て、軽くしなやかで鋭

奥の手が2種存在する変わった帝具となっているが一つ目

奥の手と言うより能力に近い

奥の手¹

刺し放つ死棘の槍

ゲイ・ボルグの特性で因果逆転の呪いで『心臓に槍が命中した』という結果をつくってから『槍を放つ』という原因をつくる

簡単に言えば一撃必殺なのであるが、驚くべきことに外れる。これでもかと言っぐらい外れる

とくに重要な場面に発動しても外れてしまい、敵味方問わず呆れられてしまう

奥の手²

突き放つ死棘の槍

渾身の力と共にゲイ・ボルグを投げる本来の使用方法

っというよりこれが本当の奥の手と呼べ、上の能力とも言える

速度はマツハ2を叩きだし、命中すると炸裂弾のように爆発を起す

こちら因果逆転の呪いを受けているためかわされても追い続けたり、一旦静止したのに関わらず再び動きだす

必ずしも心臓に命中するわけではない

備考

死んだ篋だが幼女の神様に気に入られたことにより転生する事になった青年

その時の特典としてオリジナル帝具として宝具ゲイ・ボルグと、クー・フリーン並の槍さばきができるようになってる

その時に同時に容姿もクー・フリーンになっているのだが本人はまったく気づいておらず、しばらくしてから水面にうつる自分の姿を見て気づく

戦いに関しては非常に冷徹で背後からの奇襲なども躊躇いなくおこなう

反面、兄貴肌でさっぱりとしており面倒見がいいのだが、指摘されると本人は嫌そうにする

敵だから嫌い、味方だから好きといった感じではなく親友であるうと敵になった場合、星の巡りが悪かったと笑いながら戦う

最初は戦うことを嫌っていたのだが、回数を重ねる度に強者と戦うことに生き甲斐を見付けてしまう

料理が特異なのは前世からであり、ちよくちよく自炊をしたり魚釣りをしていたりしている

頭もいたため子供に勉学に教えることも可能だが、ガキは嫌いだと言って本人は乗り気ではない

だが子供や無実の一般市民を襲う輩は許せないため、躊躇や戸惑いは一切なく刺し殺す

主人公を貫く！

「っ……っは、どこだ？」

俺は目を覚ますと知らない天井を見上げていた。いや、知ってたら逆に怖いけどな

「あ、気づきました？」

声がる方向を向くと長髪で頭の右側に花？を着けた少女が立ってるんだが、この娘はまさか……

「あ、水をここに置いておきますね？タツミー！イエヤスー！あの人が目を覚ましたわよー!!」

長髪の娘 サヤが二人の名前を呼んで出ていったが……間違いねえな。ここは主人公タツミの故郷の村だな……よりによって目を覚ました場所とはことわよ……笑えねえぜ

……っえ……す……？聞こえますか？

頭の中にあの少女の神様の声が響きやがった？気のせいだよな？

よかった。無事にあの世界に着いたみたいですね

気のせいじゃなかった……っていきなり落としてんじゃねーよ!!

すみません！まさか制限時間があつたの忘れてて……

いや、それは忘れるなよ。けっこう重要だろ

はい……ですからサービスとして身体能力なども上げて起きました！具体的にはクー・フリーン並みになりますね。そして鍛え抜けばエスデスさんでしたっけ？あの人と互角以上に渡り合えます!!

最早チート気味だろそれ!?なんで英雄と同じぐらいになってる上にあの将軍と渡り合えるレベルになれんだよ!!

お、お詫びですので。あ、そろそろ時間なので!!

あ、おい！待ちやがれ!!……一方的に会話を切りやがったなあいつ

!

「おおー！本当に目を覚ましてるな!!」

「イエヤス、あまりうるさくするなよ?」

ドアの方を向くと案の定主人公タツミとイエヤス、サヨがゾロゾロと入って来た

「迷惑をかけたみてーだな。俺は…カイだ。それで俺の紅い槍があったと思うんだが、どこにあるか知らねーか?」

「俺様はイエヤス!こっちがタツミであっちがサヨだ」

「えっとカイ…さんの槍ならそこにあるわよ?」

…マジかよ。気づかなかったが指差された方にあったとわな

「なあ!目を覚ましたばかりで申し訳ねーけど俺と勝負してくれよ
」!

…は?勝負してくれとな?どうすっかな…

「無理に決まってるでしょタツミ。カイさんは目を覚ましたばかりなのよ?」

現状の身体能力を確認しておくのも悪かねーかな

「いや、構わねーよ。その代わりに槍を準備してもらえーか？」

「え？いいのか！槍？槍ならカイ、さんのが…」

「こいつは危ねーんだよ。色んな意味でな」

「…：わかった！直ぐに準備してくる!!」

〜10分後〜

「まあこんな感じか」

タツミから槍（危なくないよう刃は潰してある）を受け取ってから慣らしのためにある程度くるくる回したりして、重さに慣れてからタツミに視線を送る

「なら準備はいい？」

「おう…」「あああ」

タツミと俺はそれぞれ武器を構える

「始め！」

まずは様子見にこの一撃でっと思いきだしたら…

「ゲフッ!？」

まさかタツミが避けきれないで一撃で倒してしまった

ナイトレイドを貰く！

あの日からだいたい一年ぐらい経った。時間が経ち過ぎ？そんな
んいいだろ、まあ簡単にこの一年を振り替えると

タツミに挑まれる イエヤスに挑まれる サヨに挑まれる 危険
種を狩る タツミに挑まれる イエヤスに挑まれる サヨに挑まれ
る 危険種を狩るの繰り返しの日々だったな

おかげだいたい戦い方がわかったし、「こいつ」の扱いにも馴れて
きたがな。んで、俺は一人で帝都に向かっている

数日前にタツミたちの村を出て危険種を狩ったり、人助けしたり、
盗賊を倒したりしてすんげ〜時間がかかったがな

「ってそれよりそろそろ帝都に着くはずだよな？」

帝都に着いて良いはずなのに俺はどこかの森で迷っていた。別に
俺は方向音痴じゃあねーからな？たぶん…

「あ？なんか今引つ掛かったような…」

まあ気のせいだろ。この森があナイトレイドのアジトの付近な

訳はねーだろうしよ

「にしても何時になったら帝都に……ッ！」

俺はすぐにゲイ・ボルクを構えて周囲を警戒する。なんのんだ今の感じは……危険種とは違う……

「クッ!? テメーら……何者だ！」

俺はとっさに身体を動かすとさっきまでいたところをなにか通り抜け、目の前に刀を持った長髪の少々が表れた

「葬る」

ッ！早いな、だが……この程度なら問題ねえ！

俺は刀に触れないようにゲイ・ボルクで受け、弾くとすぐに横風ぎに振るい距離をとり突きを繰り出すがかわされ、すぐに反撃を防御する

視線に記をくばりながら何回かその攻防を繰り返す。これじゃラチがあかねーな……仕方ねえ、あれを使うか

刀を弾いて相手と大きく距離をとり、意識を集中する。この一撃は必殺の一撃……ゲイ・ボルクが紅いオーラを纏うの確認すると少女を睨み付ける

警戒してかアイツは近づいてこねえ、これはチャンスだな

「貴様の心臓、貰い受ける！ 刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルク）!!」

紅いオーラを纏うゲイ・ボルクを突き放つとそれは変幻自在に様々な動きをして少女の“心臓”を目指す。これで決まりだな！

「ッ……」

アイツ……かわしやがった！ 俺の放った一撃を察してかギリギリのところ……かわしきりやがった……!!

「……かわしたな？ 我が必殺の一撃を！」

うん。戦闘中なのに自然とこの言葉が出たな……コイツはやっぱりナイトレイドの……

「はいはい、アカメちょっとタンマ。事情が変わった」

今度は獣化して金髪の女ってことは…

「兄さんも待ってもらえる？」

「元より戦うつもりはなかったから構わねーよ。それで、どんな事情だ？」

「兄さん、ナイトレイド入らない？」

やっぱりこじはナイトレイドのアジトかよ…

「っっていきなり勧誘かよ!？」

帝都に行くつもりがなぜかナイトレイドに勧誘されたよ…

悪を貫く！

戦いに仲裁が入ってから俺はアカメとレオーネに連れられて、アジトの内部に訪れてる

ちなみに道中考えていたんだが、今の俺の実力はアカメと同じくらい。幼女の神様がお与えた“鍛えればエスデスと互角以上に渡り合える”はずなんだがな…

まだまだってことだよな。チツ…悔しいな

そして目の前にはナジエンダ、ラバック、ブライト、マイン、シエーレ、アカメ、レオーネの全員が揃っていやがるな。流石に全員相手をするのは無理だな

「帝都を騒がしているナイトレイドが全員集合だな。ま、アジトだし当然か」

「はじめましてだな。お前の噂は聞いているよ蒼き狂犬」

「蒼き、狂犬なあ？」

…うん。犬が付くとキレそうになるな…まさかそこまで同じ

にされてるのか？って言うよりなんだよ蒼き狂犬って！変なアダ名付けた奴出てこい！

「知らないとは言わせないぞ？蒼き服で深紅の槍を手に帝都周辺で盗賊、危険種などを狩り人々を助けている存在けっこう有名だぞ、お前」

……勘弁してくれよな！なんでそんな噂になってんだよ!!確かに危険種狩ったり、盗賊倒して人助けしたがそこまで噂になるほどじゃねえだろ!!

「俺の名前はカイだ。蒼き狂犬なんて名じゃねーんだよ」

「ならカイ。改めて聞くがナイトレイドに入らないか？お前のような同志が欲しいんだ」

「ここにいる以上、答えは見えてると思うぜ元將軍ナジェンダ」

「ねえボス。本当にコイツがああ蒼き狂犬なの？コイツはただの駄犬にしか見えな」

「黙れこのピンクツインテール」

流石の俺もこれは我慢の限界だな。俺が駄犬だと？1発も当てら

れなかったのによ

「な、なによー」

「お、落ち着いてくださいマイン！」

なんか全員凄いビビってるぞ？確かにキレたけどそこまでのことか？

「あの殺気・・・エスデスと同じ、イヤそれ以上か・・・」

「まあいいさ。仲間になってやるよ」

どうせ帝都の方も就職できなさそうだしマトモじゃねーからな。それならナイトレイドの方がマシだからな

「そ、そうか・・・ようこそナイトレイドへカイ。歓迎するぞ」

「ま、仲間になるからには襲いはしねーから安心しろよ。それよりも・・・」

俺はアカメの方を真っ直ぐに見つめ詰め寄る。可愛いとは思っ

今はそれよりも…

「さっきの続きをしねーか？流石に中断だと消化不良だな」

「…いいだろう。私もお前と戦えば私も強くなれそうだからな」

「俺も参加していいか？」

ブライトも参加か。まあいい…強い奴と戦えばその分強くなれるからな